

優秀賞

都市・寄せ場 — 隠蔽された「住宅の公共性」 —

笠井勇 (笠井工務店)

序文

2007年寒気極まる時期、新宿にあるホームレス生活支援団体にSOSメールが殺到した。メールの内容から「どうやらネットカフェで寝泊りする生活困窮のフリーターがいるらしい…」というホームレス生活支援団体の示唆によって、2007年1月28日、日本テレビ系ドキュメンタリー番組「NNNドキュメント ネットカフェ難民～漂流する貧困者たち」が放映された。映像には、ネットカフェを拠点にしながら、大きな荷物と携帯電話を身につけた一見すると何処にでもいるような20代から30代の若者の姿が映し出されていた。以後、番組名を冠して「ネットカフェ難民」とカテゴライズされた人々は、同年3月15日に参議院厚生労働委員会で取り上げられ、格差社会を象徴する現象として位置付けられていった。

日常的な生活風景の中に見られるようになったこのような光景は真新しいものではない。思い出されるのは1996年1月24日早朝、新宿西口地下通路にあった野宿者のダンボールハウスを「動く歩道」設置のためという理由で東京都が強制撤去した、あの光景である。機動隊員・カードマン等総勢千名が動員された撤去の光景は、ニュースやワイドショーで繰り返し報道された。

これらの社会的事件はマスコミの劇的な編集によって同情的なものからただの興味本位に至る個々様々な感情を湧き起こした。「公共」空間に組み立てられたダンボールハウスやネットカフェで寝泊まりし、都市に散在する様々な施設を活用していく生活は、「私」性の空間である「住宅」で「家族」と共に寝食し、「公共」空間へ働きに出かけるブラウン管の前に座る人々の生活とは根本的に違った。つまり、ネットカフェ難民やダンボールハウスで生活する人々は、常に「公共」空間で過ごしている、または、どこからが「公共」的領域なのか、どの時点で「私」的領域に変わるのか、「公」と「私」の曖昧性、もしくは「公」「私」に変わる新しい概念がそこに存在しているのか・・・どちらにしても「公」と「私」を明確に分離して生活している人々の潜在意識を揺さぶる光景がそこにあった。そして、その社会にこだました様々な反響の源に通底するもの、それは「近代的パラダイム」それ以外他ならなかった。

「公共」空間における管理システム

東京都は新宿西口におけるダンボールハウスの強制撤去後の「管理」として、13億円を投じて「臨時保護施設」を設置した。この「保護」を名目とした収容所は、有刺鉄線を張り巡らせた孤島に位置していた。また、「歩く歩道」と共に「オブジェ」を設置し、再び公共空間に野宿者が現れないようにした。東京都による一連の行為、「公共」空間から野宿者を「排除」し、臨時保護施設とオブジェの設置による野宿者の存在と痕跡の「隠蔽」、そして厳重な「管理」、非社会的存在に対する「排除」→「隠蔽」→「管理」という我々の「公共」空間に存在するメカニズムは、日本の近代化の過程で設置された。

明治政府は、戸籍法によって国民化を図った。一つの戸に属し戸主を筆頭とする単位に人々を組織し管理した。そして、この単位、組織に自ら身体を組み入れることによって「国民」となれた。大正期には、東京郊外において、管理国家の新たな最小単位である「家族」が暮らすための新しい生活を求めた動きが活発となる。政界、学界、理想主義者のユートピアは戦後の大衆的郊外化によって成熟していく。この国民国家と資本主義社会との運動は、一つの「家族」が一つの「土地」と一つの「住宅」に「定住」することが平準であり「国民」である、という規範を人々に植え

付けた。

逆に、「非家族」であり一つの「土地」に「定住」せず「非組織」的な人々は「国民」になれない。「国民」になれない人々は国民国家の管理外にある。管理の対象外になった人々は、非「国民」的管理を受けることとなる。それこそ、我々の「公共」空間に存在している「排除」→「隠蔽」→「管理」というメカニズムである。戦後から高度成長期に始まる「寄せ場」の形成は非「国民」的管理の一例である。

作られた場所「寄せ場」

1945年の東京大空襲で焼け野原となった上野公園には行く末のない「国民」的管理になじむことができない多くの人々が集まっていた。これらの人々に対して東京都は、「労働能力のない者」は養育院へ、「労働力のある者」、主に単身の男性は暴力団や右翼の経営する「収容所」へ、労働能力に応じて腑分していった。しかし、特に後者の「収容所」の収容能力には限界があり、また脱走が頻発したため、東京都は新たな「収容所」を計画する。それこそ通称「山谷」「寄せ場」である。

木賃宿が軒を連ねていた山谷も大空襲で焼け野原と化していた。東京都は米軍から供与されていた大型天幕やベントを木賃宿の経営者に貸し出し、テント村を設け、その管理・経営をその経営者たちに任せた。その後、東京都の「狩り込み」と呼ばれる強制収容が始まる。上野公園に集まっていた「国民」的管理に馴染まない人々をトラックに乗せ山谷へ送り込んだ。戦後の山谷は行政によって「作り出された場所」であった。

しかし、新たに作り出された収容所は不十分にしか機能しなかった。1949年のデフレ後、山谷に「家族」を含む失業者の群れが流れ込んでしまったのである。「家族」とは「国民」的管理を受けるべき夫、妻、子どもで構成される単位である。その後、「家族」を含めた山谷は「管理」不届きのまま、東京オリンピック、大阪万博博覧会という官民主導による大規模なイベントの建設を境にして大きく変貌していくこととなる。東京、大阪の均質的な都市風景が形成していく中、「寄せ場」に広がっていたスラム的な空間も同様に均質性を帯びていく。

1960年代に入ると釜ヶ崎、山谷で立て続けに暴動が起り、マスコミを通じて「寄せ場」の存在がアピールされ「社会」問題化される。この「社会」問題とは「家族」を規範とするイデオロギーである。「家族」と共に一つの「土地」と一つの「住宅」に「定住」し、父は都心で働き、母は家庭を守る、そして子どもは「学校」へ通う、このような人々が急激に覆い尽くしていく新たな「社会」にとって、「寄せ場」での現象は非「社会」であり問題であった。この頃の「寄せ場」では、未就学の子どもが多く「学校」へ通うよりも働きに出て、貧しい「家庭」を助けていた。このような非「社会的」な現象に対して政治家、マスコミ、研究者、ボランティア団体等、政治的な枠を超えた保護複合体が子どもの救済にのりだした。特に1963年の山谷対策には「山谷地区、世帯宿泊者のために公営住宅400戸を2ヶ年にて建設し、転居させる」とあり、女性、子どもの都営住宅への移住が進み、「家族」の解体を完了させた。そして山谷は「単身」労働者の街となっていったのである。

「都市・寄せ場」 ロビンソン・クルーソー島の生成

寄せ場内の「家族」が解体された。そして寄せ場へ流れ着く者、そのほとんどは「家

族」との関係が薄れまたは消失した人々である。高度成長期以降、「単身」で「定住」することのない人々が集積した状態で都市開発が進んだ「寄せ場」はどのような空間を形成していったのか。

寄せ場に多く建設されたのは簡易宿泊所＝ドヤである。寄せ場単身労働者にとって安全で雨風を防げる日払いの低料金のドヤは必要不可欠である。ドヤがドヤであるためには、身体を休めるだけの小さな部屋を数多くすることが第一である。また、寄せ場単身労働者の大半は男性の肉体労働者である。男性であること、肉体を酷使して働く者の家事能力は著しく低いゆえドヤに常設的な家事機能はさして重要ではない。だから、キッチン、バルコニーは付けず、トイレは共同にして、ただ部屋数を稼ぐ。また、出入れの激しいドヤ利用者にとって、大きな家財道具など持ちえるはずもない。荷物といえば仕事のための作業着がかさばるくらいである。だからドヤに収納も要らない。生活機能を極限にまで削いだ各部屋を繋ぐ廊下・階段は、短期宿泊型ゆえ内部に設ける。一般的に住空間の外観が内部を強く反映するように、ドヤの外観も内部特性を著しく反映している。平坦な壁面に3畳間を反映した小さな窓が、部屋の規則性に合わせて並ぶ。

住むところとしての生活機能を極限にまで削いだドヤ。それは寄せ場の住人が食事をせず、洗濯を全くしないというわけではない。生命を維持するために栄養を必要とするし、洗濯もする。よって生活機能の少ないドヤを利用する人々はそれを補うために寄せ場地域全体で生活を充足することとなる。ドヤの生活機能を補完する寄せ場地域には飲食店、弁当屋、銭湯、酒店、露店、コインランドリー、仕事に行くときなど必要ない荷物を預けるためのコインロッカーが数多く立ち並んでいる。小さな商店では様々な食品が単身者向けに売られており、たこやほたての刺身、たらこやソーセージ、キャベツなどが小さなサイズにカットされ、洗濯用の洗剤や石けん、ティッシュ等が小分けされて売られている。

「社会」の空間が「家族」をパラダイムとして、郊外には「家族」の住まう「住宅」、都心には無機質な窓割りが連続するオフィス群が乱立していくのと平行して、非「社会」の空間では「個」をパラダイムとした「都市・寄せ場」が形成されていった。「社会」の外側に流れ着いた「非家族」で「非定住」の人々が集積する絶海の孤島に、それらの人々の合理的な生活を約束した”ロビンソン・クルーソー島”が生成されていった。

「都市・寄せ場」のコミュニケーション

午前五時、青空労働市場に喧嘩が生まれる。青空労働市場とは、手配師と日雇い労働者の就労契約が交わされる場所である。車できた手配師たちは、棒状にした新聞紙を叩きながら「ザコ、メシ、サンゴー」（「ザコ」＝雑役、「メシ」＝メシ付き、「サンゴー」＝3,500円）等と大声で叫び、日雇い労働者たちとその日その日の労働契約を交わしていく。交渉成立した労働者たちは、手配師の用意したワゴン車に乗込み、怒声罵声の響く労働現場へと向かう。一日の労働が終わり、寄せ場に帰ってくると風呂や飲み屋で明日の英気を養い、「大部屋式」の宿泊所で大勢で枕を並べて一日の出来事を話したり、蒸し暑い夏場には喧嘩も頻繁に行われ、良くも、悪くもそこでコミュニケーションをとっていた。

しかし、80年代以降、ドヤの「個室」化、ビジネスホテル化の進行によって、大

部屋式の宿泊所にあった枕を並べてコミュニケーション、それは「アットホーム」とは言えないまでも一つ屋根の下、寄せ場の人々にとっての「住宅」的な場所でのコミュニケーションの機会を失わせた。中廊下に3畳間の個室が並び、3・4層程度に積み重ねられた「デラックス・ドヤ」では、コミュニケーションがない。しかし、それは寄せ場の住民同士のコミュニケーションが完全に失われた訳ではない。安価にするため、諸機能（キッチン、リビング、収納等）と広さを削ぎ落としている「個室」のドヤ生活は、必然的にドヤの外へと広がっていく。寄せ場地域に並ぶ大衆食堂、ホルモン焼き屋、銭湯、コインランドリーを利用することで生活機能の少ないドヤ生活を補っていく。銭湯で湯船に浸かっている時間、コインランドリーの待ち時間、路上にビールのケースを置いて狭い店を拡張した飲み屋では野球観戦で皆が共に賑わう。「個室」のドヤを起点に路上や寄せ場地域に散在する諸施設を利用して「都市・寄せ場」の生活は、「必然的なコミュニケーション」を生みだせる。

隠蔽された「住宅の公共性」

山谷地区は、台東区と荒川区の境にある汭橋交差点を中心とした簡易宿泊街を指している。山谷地区周辺にはJR南千住駅に繋がる陸橋、小学校、公園、商店街等の「日常的な風景」が広がっている。「日常的な風景」とは「家族」をパラダイムとした「社会」の空間を意味している。JR南千住駅から南下すると簡易宿泊街が広がる。多少の老朽化やドヤの窓割り、コインロッカー、コインランドリー等、「個」をエレメントとした寄せ場独特の景観が垣間みれるの、その景観は「日常的な風景」とさしてかわらず、一見すると「公共」空間である。山谷地域内にも「公共」空間と同様に公園や学校、商店街、それらを繋ぎ合わせる「路上」が張り巡らされ機能主義的な空間構成を有している。しかし、そこでの振る舞いは「機能」にとらわれていない。路上で談話し杯を交わしそのまま寝てしまう、そこはリビングであり寝室にもなる。飲み屋や露天は路上へとどどんと拡張され、ダイニングキッチンが寄せ場に点在していく。コインロッカー、収納の多さは目に目立つ。

景観としては、周辺環境、「日常的な風景」と似通ってはいるが、都市・寄せ場に「公共」空間は存在しない。ドヤや様々な諸施設を含めた都市・寄せ場の空間は公共「的」空間である。つまり、それは表層的には「公共」空間であるが本質的には異なる。公共「的」空間は、「社会」側から眺めれば、「住宅」内の空間や諸機能が散在し、外部空間が住宅化し、「住宅内」的振る舞いが存在している。「私」性の領域である「住宅」と「公共」の領域が分離した「社会」の空間と異なり、公共「的」空間は住宅化しているのである。公共「的」空間ないし「都市・寄せ場」の空間には、「私」性と「公共」性が曖昧に混じり合った「住宅の公共性」が隠蔽されている。

「住宅の公共性」には、機能に縛られない振る舞いがあり、その振る舞いこそ官僚制的統治システムの機能不全を起す恐れのあるものである。つまり、「家族」と共に一つの「土地」と一つの「住宅」に「定住」し、「公共」空間では「私」性を捨てた公共性ある振る舞いをしてこそ管理が成り立つ。「住宅の公共性」は、国民国家が社会を確実に管理、組織するため、「公共」空間から排除され「寄せ場」に隠蔽された。そして、寄せ場は、高度成長期に始まる都市開発によって、周辺環境、日常的な風景と均質性をもたせる事によってカムフラージュされた。それは、我々の

目を欺くことによって、我々の生活から自由な振る舞いを奪い、「住宅の公共性」を生じさせないための隠蔽工作であった。

あとがき 「住宅の公共性」を奪還せよ!

近代社会がもたらした公領域(国家)と私領域(家族)の分離は、戦後の大衆消費社会において強固になった。父は都心で働き、郊外のインテリアで彩られた持ち家では母が家事・育児・消費を担当する。「私」性が増々「住宅」へ内包され、私の領域である「住宅」と公共の領域の強固な分離生活は「日常」と化した。

この「日常」は「家族」つまり、父、母、子それぞれが決められた役割分担をこなしている間は幸福な時間が流れていた。しかし、時が経ち、子供の自立、女性の社会進出、肉体的衰退、「家族」が「家族」として成り立たなくなった時、近代的パラダイムの限界が社会に露呈し始めた。住宅内での高齢者の孤独死が相次ぎ、若年者の孤独死も増加している。昨今の高齢者の行方不明は、明治時代に始まる統治システムの機能不全を象徴する事件であると言える。

今こそ新しい住まい方を構想する時ではあるが、この「日常」は大きな柵として私たちの前に立ちただかっている。増加の一途を辿る単独世帯の高齢者や片親と子で構成される世帯(平成20年 厚生労働省)は、「家族」との関係が希薄もしくは消失している限りにおいては、この強固でDNA化した「日常」を打破し、新しい住まい方を構想しなければならない。

強固な「日常」を打破する手がかりとして、非「日常」を見る事、それこそ「寄せ場」を見る所以であった。社会は非「日常」を寄せ場に隠蔽した。しかし、社会は寄せ場に近似していくというアイロニカルな変化を遂げているのである。

寄せ場では「家族」「住宅」レスになることで逆説的に都市・寄せ場全体が住宅化し、「住宅の公共性」が生成されている。そしてこの「住宅の公共性」が生成された場所には、必然的で内輪的なコミュニケーションがある。

また「住宅の公共性」は、近代以前、長屋住まいの井戸端でのコミュニケーションのような、人々の内輪的な関係の中に存在していたのではないだろうか。「九尺二間の裏長屋」は、間口9尺(約2.7m)、奥行二間(約3.6m)の極小住まいで、玄関を開けると直ぐに台所、奥に4畳半の小部屋が一つあるだけである。金銭の蓄えないその日その日暮らしの狭く低機能な長屋住まいでは、生活を充足するために必然的に住居の外部へ出る。井戸に集まった「カミさんたち」は炊事・洗濯をしながら一日世間話をしながら過ごす。「井戸端会議」には、住居とその外部とを流動的に生活する流れの中での必然的で内輪的なコミュニケーションが発生していたと言える。

寄せ場と裏長屋では低機能な住まいと都市的・地域的機能の相互補完的關係、そしてその都市・地域全体を流動的に暮らす人々の生活スタイルによって「住宅の公共性」が生成されている。つまりまずは低機能な空間もしくは「個室」の設置から始まっている。「個室」の設置の現代的有効性は第5回ダイワハウスコンペティションに投稿した「NET CAFE STYLE」で記した。そしてその中で、反近代的・非日常的な生活を送ることによって、必然的で内輪的なコミュニケーション、「住宅の公共性」の生成の可能性が生まれるのである。高齢者の住宅内での孤独死、育児ノイローゼによる幼児虐待これら社会の状態を象徴するような出来事に対して、生

活の流れの中での必然的で内輪的なコミュニケーションという何気もないものこそまずは必要ではないか。そして、それを促す建築的・都市的試みが必要なのである。そのモデルは寄せ場にあった。都市・寄せ場には個の単位に分解されていても、個を単位とした必然的なコミュニケーションが生まれている。

「住宅」を壊し、もしくは「住宅」の壁を破壊し、強固にDNA化した「日常」近代的パラダイム」を打破するためには、まずは非「日常」的に生活することである。そして「ネットカフェ難民」を人間類型として考えること、都市を寄せ場化し隠蔽された「住宅の公共性」を奪還すること、そして、都市をロビンソンクルーソー島として再定義することこそ必要なのである。